

タイムマシンはいらない

毎日新聞大阪本社診療所 林(三宅) 佐栄子

「人生七十古来稀」(人生どうせ七十歳まで生きるやつは少ないのだ)と半ば投げやりに詠った杜甫は唐の時代の人。寿命が45歳くらいだった明治・大正時代ならまだしも、そこから寿命が四十年延びている今どき「稀」はないだろう。

人生には三つの歳がある。暦年齢、身体年齢、精神年齢だ。人に迷惑を掛けない限り他人の目をあまり気にせず自由に生きてきた身には、精神年齢は十代の頃とさほど変わってはいない。私は生まれが西宮で、30歳以降現在までは京都の住人だが、思えば大阪市北区には縁がある。

まず阪大の中之島キャンパスが北区。阪急梅田から歩いて二十分余りかけて通学していたが、その途中、堂島にあった毎日新聞のレトロな旧社屋の前を通るたびに、ネオ・ルネッサンス様式の風格あるファサードを見上げていたものだ。1992年に新社屋は西梅田に移ったが、何とこの二十余年、当の新聞社にお世話になり産業医兼診療所長として予防医学に携わっている。

二十代後半の四年間には同じく北区の桜橋渡辺病院にお世話になった。一年間の麻酔科修業のあと循環器内科を選んだのは、

自分の判断がすぐに結果として出ることが性に合っていたからだ。当時は夜間の救急呼び出し対応のため歩いて3分の北区堂島に住んでおり、北新地は庭だった。夜遅くに買い出しや食事に行くため新地本通りを歩いていると、よく「おはようございませす!」と声を掛けられたものだ。

渡辺病院には阪大から沢山の先輩が当直や手術の応援に來られていて、後に第一内科教授となられる堀正二先生や、開心術のために來られていた北村惣一郎先生を始め心臓外科の錚々たる先生方からも直接指導していただくご縁を得た。

人生は縁が導いてくれるものだ。

関西からの転校生で、現地の学校事情など何も知らなかった私に国立の福岡学芸大学(現教育大)附属中学校受験を強く勧めて下さった博多の別府(べふ)小学校六年生時の恩師、桜橋渡辺病院から京都桂病院へ呼んで下さった老年病学のエキスパート並河昌晃先生、大阪医大から桂病院へ指導に來られて循環器内科臨床医としての基本を叩き込んで下さった弘田雄三先生、皆泉下の人となられたが、この方々を始め多くの恩師との偶然の出会いと導きが、小学二年時の作文で「将来はオペラ歌手になりたい。」と書いた天然女子を今に繋げてくれている。

毎日新聞に赴任してからも、多くの個性的かつ魅力的な新聞

人との出会いがあった。特に山歩きのサークルで一緒にした目上の方々とは医者と患者という関係を超えて自然の中で会話を楽しみ、その博覧強記に教えられることも多かったが、その内数名とは事故に等しい突然の別れがやってきた。

自分を置いて先立つ方々が、じわりじわりと増えて行く現実を突きつけられると、残念ながら暦年齢を感じずにはいられない。だがタイムマシンに乗って過去や未来へ行きたいかと問われても、過去へも未来へも行きたいとは思わない。

過去に戻って優しくかった両親や、恩師の若き姿に会えるのはいいとして、怖いもの知らずで生意気で憎たらしい自分に会うのはまっぴら御免だ。思わず注意して自分史を変えてしまいたくなるだろう。

未来に行って「まだまだお若いですね。」と言われていれば（本当に若ければ言われぬ）お世辞としてもまんざらでもないが、認知症で要介護5にも関わらず介護施設入居はイヤだと駄々をこね、縁あって再婚した伴侶に迷惑掛け放題の我が身を目の当たりにすれば、今を楽しんで生き抜く意欲が削がれるに違いない。

だからタイムマシンはいらない。どう転ぶかわからないところが人生の醍醐味だ。

ただいつも、日々の仕事の先にはご褒美の餌をぶら下げるよ

うにしている。今はWEBでライブ映像を楽しむだけしかできないが、コロナが収束すれば、訪ね残した世界中のオペラハウスやコンサートホールや教会に身を置いて生の音に浸ろう。忘れられない一皿目当てに、とっておきのレストランを再訪するのもよいかも。いつかはヴェネトやトスカーナの丘陵に点在する歴史あるヴィッラとその庭園へも足を延ばしたいものだ。

今は只々「コロナで人生を停めるな」と自分に言い聞かせながら、出会ったすべての人々に感謝しつつ、決して「稀」ではない節目の年を期待と好奇心一杯に進んでいる。



毎日新聞大阪本社旧社屋
大正11（1922）年3月竣工
1958年6階屋上に建て増しされたのが旧診療所